

谷川士清生誕300年記念 洞津谷川塾『ことすがさんに親しもう』

副代表 馬場幸子

(まえがき)

谷川士清生誕300年記念事業の第2弾として、洞津谷川塾全6回を企画・開催しました。

士清が21才で京都へ医者としての勉強に出向き、26才で津へ戻って医者の仕事をしなが、京都で学んだ豊富な知識を人々に教えようと洞津谷川塾を開いたのは周知のことです。

私達の会では、これまで毎年夏休みに『親子洞津谷川塾』（主として小学校4・5年生と保護者20組対象）を津市文化課と共催で開き、士清の話や、史跡巡り、紙芝居、茶会などをしてきました。

今回、一般の市民向けにも少しでも『ことすがさん』に親しんでもらおうと、全6回の塾を開いたのです。

4名の講師の先生方は、いつもの事ながら快諾してくださり、盛り沢山の内容の塾を展開することができました。以下、その内容を述べてみます。

■第1回 9月12日(土) 10時～ 講演会「本居宣長への士清書簡を読み解く」中央公民館2F

講師：本居宣長記念館館長 吉田 悦之氏

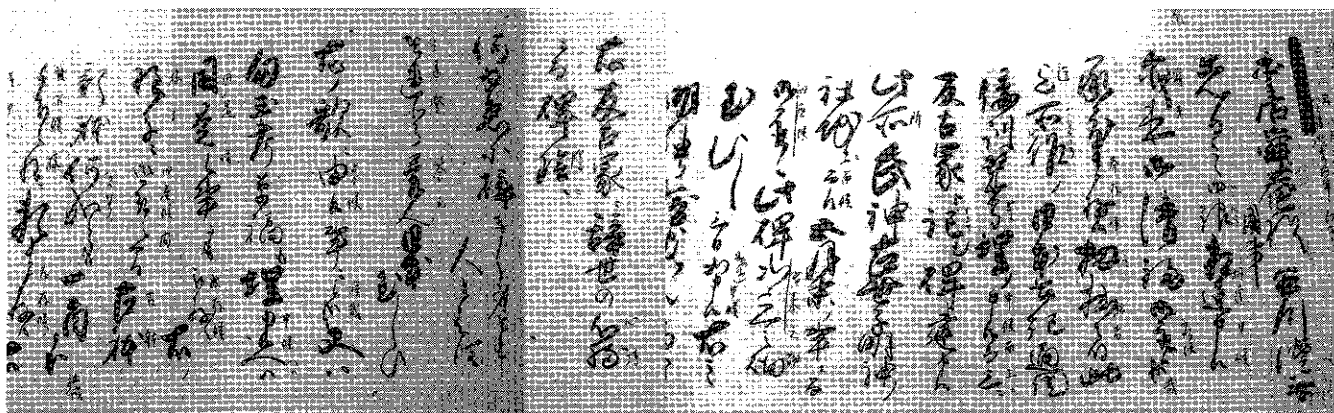
明和8年(1771)2月23日付士清63才の時、本居宣長(42才)宛に出した書簡を原文のコピーで、読み方を教えていただきながら、わかりやすく解説されました。又、安永4年(1775)8月27日付の書簡では「草稿を反古塚に埋めた」という士清の様子を後世の我々が知るのに、宣長との書簡がいかに重要であるか、例えば、反古塚の辞世の歌、勾玉考のこと、倭訓栞と古事記伝執筆中の二人の間の往復書簡など、また学者同士の親密さも伺い知れて嬉しく思いました。

吉田先生のプリントによると、士清は明和7年の秋以来明和8年のこの日までに『倭訓栞』稿本を3回貸しており、この年の内に更に4回稿本を貸し出し、計7回となっています。また、12月10日の宣長の士清宛書簡によると、『栞』5巻を読了・返却し、自分の『古事記伝』を士清に貸し出しています。従って『和訓栞』稿本の第1番の読者は本居宣長であり、古事記伝の最初の読者は士清である事が分かります。最初士清の学問に批判的だった宣長が、和訓栞の序文を書き、士清を国学の猿田彦とも讃えています。安永5年(1776)7月23日(士清68才・宣長46才)の宣長宛書簡では宣長の『字音仮字用格』を重宝している事と、「『古事記伝』の次の巻が出来たら見たい」との記載がありますが、その2ヶ月半後の10月10日士清逝去、福蔵寺に葬られました。

最後の最後まで学問を追究している姿が目に見えます。

(注)：士清・宣長の年令は数え年

安永4年8月27日宣長宛士清自筆書簡の一部(写真)



■第2回 10月4日(日) 身近な薬草観察会

講師：南 寿氏(南漢方薬局店主)



10時に津新町駅集合で、南先生よりメモ帳、ボールペンなどの参加記念品をいただき、思いも寄らないプレゼントに、足取りも軽く出かけました。線路を越え新町公園へ。桜の木、柿の木の下でまず薬効の説明。線路の傍に生えている草や花にも立ち止まり説明を受けて、再び西の方へ。

新町通りの南側の路地や家々の庭で、朴の木、アロエ、銀杏、南天と次から次にどこにでもある草木、花にすばらしい漢方としての効き目があること、使い方を間違えると危険であること等を教えていただきました。早速、試してみようと思いました。

薬草観察会